

第5章

社会システムとエコシステムの媒介点としての〈農〉 ——『社会—生態システム』の視点から——

上柿 崇英

これまでの章で述べられてきたように、本書で〈農〉が一大問題圏域として取り上げられるひとつの背景には、この〈農〉というキーワードが、行き詰まった“近代文明”を乗り越え、“新しい文明”を展望していくための“重要な何か”を現前させる契機となるのではないか、という問題意識が存在している。この論点を深めるためには、われわれの歴史的な一到達点である“近代文明”の本質を問題とし、〈農〉というものが、いかなる形でその本質に迫りうるものなのかを明らかにせねばならない。

“近代文明”の本質とは何か、またその特殊性とは何か。これらを考える方法には、総論で述べられているように、例えば「科学革命」や「機械論的自然観」といった世界像 (cosmology) の様式を問題にする方法¹⁾、あるいは「疎外された労働」や「共同性喪失」といったものを内包した社会システム (social system) の様式を問題にするといった方法がある。これに対して本章で採用するのは、“近代文明”を社会システムとエコシステムの関係性から捉える、という方法である。人間存在が作り出す社会システムは、常にその基底となるエコシステムとの相互作用のもとで成立していながら、他方でエコシステムの作り出す秩序には還元しきれない独自の秩序を構成するという特徴を持っている。つまり、この二つの自立的なシステムが作り出す関係性のあり方が、“近代文明”の成立において、ある際だった変容を遂げたわけである。いや、正確には、この関係性のあり方が際立った変容を遂げることによって初めて、われ

われが生きる今日の社会が成立し得たのである。

そして本章では〈農〉を次のように定義する。すなわち〈農〉とは、人間存在の歴史の中で長年の間、常に社会システムとエコシステムの相互作用を直接媒介する基点となってきたものであり、社会システムとエコシステムの狭間に位置する人間存在の「人間—人間関係」と「人間—自然関係」に対して、独自の意味を与える「〈農〉的世界」を構成するものである。そしてこの「〈農〉的世界」は、“近代文明”における人間存在の「人間—人間関係」と「人間—自然関係」を構成する「〈工〉的世界」と対比させられる、というようにである。

結論から述べてしまえば、“近代文明”が成立した契機になっていたのは、社会システムとエコシステムの関係性に対する社会システムの側からの一方的な“遮断”であり、それは社会システムが、エコシステムから切り離された、純粋に“社会的な論理”によって高度に自己組織化されることを通じて行われた。そしてこの二つのシステムの断絶は、それを巧妙に覆い隠す特異な世界像によって支えられてきたのである。われわれが「20世紀」という時代に用いてきた「成長」、「開発」、「予測」、「制御」、「進歩」といった概念は、まさにその世界像を構成する支柱としての役割を果たすものであった。実は「〈工〉的世界」とは、そのような世界像、社会様式によって成立するものなのである。

われわれは“近代文明”によって切断された二つのシステムの関係性を修復させ、それに基づく新しい社会を構想しなければならない。われわれが目を向けるものが「〈工〉的世界」の範疇にある限り、われわれは所詮「20世紀」を引き延ばすことしかできないだろう。われわれはこのパラダイムを乗り越えて初めて、真の意味で「21世紀」という新しい時代に足を踏み入れることができるようになるのである²⁾。

1. 「社会—生態システム」とは何か

それではまず、社会システムとエコシステムの関係性を捉える際の、基本的な枠組みの方から見ていこう。ここで最も重要なのは、社会システムとエコシステムがそれぞれ独自の秩序を形成しながら、常に互いの秩序に影響を与える

共適応 (co-adaptation) の関係性が成立してきたという認識である。この観点に理論的な土壌を与えたのは90年代以降の複雑適応システム (complex adaptive system) の概念から出発した一連の研究成果であり、本論ではそれを「社会—生態システム論 (social-ecological systems theory)」と呼ぶことにしたい³⁾。

1) 複雑適応システムとは何か

もともと複雑適応システム概念は、特定の秩序を持つエコシステムがなぜ、あるきっかけによって予測不可能な形で“異なる秩序”へと変容してしまうのか、ということの説明するためのものであった。“自然”に対する認識として80年代まで主流だったのは、オダム (Odum, E) に代表される生態系生態学 (ecosystem ecology) であり、そこでは生物・無機物の織りなすエネルギー代謝と物質循環によって成立する、エコシステムの“秩序”が強調された⁴⁾。これは平衡システム (equilibrium system) と呼ばれる考え方に基礎をおいており、そこから導出される“自然”のメタファーとは、調和、統一性、均衡、恒常性といったものであった。

しかしその後、エコシステムは必ずしも生態遷移や極相群集といった予測できるパターンをもたらしわけではないという認識が広がり、そこから出てきたのが複雑システム (complex system) の考え方であった。例えば火災の発生を抑制する人為的な操作が、結果として制御不能なより大きな火災をもたらしたり、特定の生物種の減少が予期せぬ形で資源の回復不能な状態を引き起こしたりするように、“自然”のもたらす運動は多くの場合予測不可能である⁵⁾。

つまり“自然”のもつ、この平衡システムとしての特性と、複雑システムとしての特性を融合したシステムのモデルが、複雑適応システムなのである。それでは、“自然”はなぜ平衡システムのような挙動を見せるのか。このことを理解するには、エコシステムという“秩序”がいかにして形成されるのか、すなわち群集集合化 (community assembly) と呼ばれる進化論的なプロセスを見ていく必要がある⁶⁾。

まず、火山の噴火によっていったん不毛となってしまった島があるとする。火山が落ち着いた後、外から生物が参入を繰り返すことで、ここに新しいエコ